

杏林

KYORIN DAIGAKU SHIMBUN
大学新聞

- 1-5面 特集 医学部50周年 時代が求める良き医師を
「真善美の探究」とともに 学園長・理事長 松田博青
杏林教育の歩み
これからの医学教育が目指すもの 医学部長 渡邊卓
杏林大学と歩んだ46年 医学部教授 楊國昌
卒業生メッセージ
- 6面 ウィズコロナの教育
新しい学びの形始まる
- 7面 学びの視野を広げよう
- 8面 連載 金田一教授の研究室から
健康ひとくちメモ 骨粗しょう症と栄養
- 教育・研究環境を整え新たな半世紀へ 副理事長 松田剛明

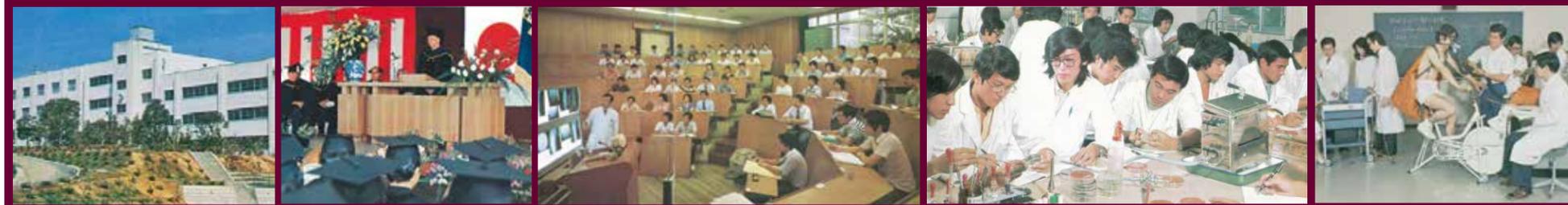
特集 医学部50周年 時代が求める良き医師を

1970年に開設した医学部は今年、50周年を迎えました。卒業生は、全国各地の地域医療を担う医師として、母校の付属病院を支える医師として活躍しています。

24号では医学部50年の歩みを卒業生や学園関係者の声と共に振り返り、これからの杏林大学医学部の目指す姿をお伝えします。



医学資料情報センター棟



杏林大学創立10周年を記念して建設された医学資料情報センター棟は1981年に完成。時計棟として親しまれ、学生たちの成長を見守ってきた。下段左から完成当時の八王子校舎（1970年）、入学式（1971年）、1980年頃の授業、実験の様子

「真善美の探究」とともに

まつだ ひろはる
杏林学園 学園長・理事長 **松田 博青**

良医の育成半世紀

本学の医学部と付属病院は、今年で創立50周年を迎えました。

私共は建学の精神である『真善美の探究』のもと、半世紀の間、「優れた人格を持ち、人のために尽くすことのできる人材、すなわち良医の育成」を教育の基本としてまいりました。

この間は試行錯誤の連続であり、さまざまな苦難にも直面しましたが、50周年を迎えることができましたのも、多くの皆様のご尽力とご支援の賜物と深く感謝申し上げます。また、これまでの教職員の努力の積み重ねにも謝意を表したいと思います。



医学部と病院 成長のあゆみ

国民皆保険の定着に伴う医師不足の中で、戦後初めての医学部の新設が認められ、本学に医学部が誕生したのは1970年（昭和45年）でした。初めての入学式で学園の創立者である松田進勇は、「医師の仕事は崇高な聖職であり、医師である前にまず立派な社会人たれ」と新入生に呼びかけています。

以後50年、卒業生は4,300人余に及び、全国でその役割を果たしています。

医学部の研究教室は47を数えるまでになりました。付属病院も診療科は発足当初の14科から37科となり、東京・西部地区の中核病院としての評価を頂いています。

医療の将来見据え行動を

奇しくも50周年の節目の年に、私共は新型コロナウイルス感染症への対応という未知の世界と向き合うことになりま

した。医療現場では初めての経験が続き、困難な状況の中で患者さんを救うための努力が積み重ねられました。

この事態に対する経験から、私共は医療関係者が協力して夫々の役割を果たすこと、変化する事態に対応する柔軟性や先見性を持つことの重要性を改めて学びました。

医師を志す若者たちへ

また同時に医師を志す人々が、これからの自分の人生で困難な事態に直面する時でも、病に苦しむ人々に対しては自分の出来る範囲内で手を差し伸べる人材に育つ様に、私共も今迄以上に努力するつもりであります。

私共は学園内の個々の案件の改良改善に対しては時代の変化に対応させながらも、「建学の精神」は引き続き堅持していく方針であります。今後とも皆様の御指導をお願い申し上げてご挨拶と致します。

特集 医学部創立50周年

杏林教育の歩み

1970年、杏林大学医学部の歴史は、八王子市西部の山の中の広大な土地を切り拓いたキャンパスから始まりました。『杏林学園十五年史』には、開学1年目は、教育環境の整備等々から「線路をつくりながら汽車を走らせ、汽車を走らせながらダイヤをつ

くっていくという状況であった」と記されています。1979年には、三鷹キャンパスで6年一貫教育が始まり、2000年頃からは、初年次教育の充実や、国家試験対策、グローバル教育などにも力が注がれました。医学部の50年を写真とともに振り返ります。



全寮制だった頃の学生寮(上)、グラウンドで練習する運動部(下) 卒業証書を授与する松田進勇初代理事長

1975年当時の三鷹キャンパス(上)、2016年に行われた第1回白衣式(下)

1954年 三鷹新川病院開設 (医学部附属病院の前身)	1970年 医学部開設 附属病院開設	1976年 第1回卒業式 大学院医学研究科設置	1979年 三鷹校舎で6年一貫教育始まる 医学部附属病院に救命救急センター開設	2003年 医学教育学教室開設	2005年 海外クリニカル クラークシップ開始	2016年 第1回白衣式	2020年 医学教育分野別評価認定 (医学部の教育が国際基準に認定)
-----------------------------------	--------------------------	-------------------------------	---	--------------------	-------------------------------	-----------------	--

病院実習と医学教育



杏林大学病院

多摩地域の中核病院としての役割を担う杏林大学医学部附属病院。ここで行われる臨床実習は、高い教育効果をもたらしている。

救急実習

救命救急センターは1979年に開設された。学生時代の思い出に、同センターでの臨床実習をあげる卒業生は多い。

富田泰彦医学教育学教授(12期生)は、「救急車に同乗して患者を搬送した救命センターでの実習は今も鮮明に覚えている」と振り返る。奥多摩病院(東京都西多摩郡奥多摩町)の医師、小林史典さん(41期生)も「ここでは専門以外の患者も診るため、どんな患者も対応する救急実習の経験が生きている」と話す。

良医育成を目指した教育



学生・教員 双方向の教育を推進

“学生と教員の距離の近さ”を、杏林大学は大切にしてきた。現在は、全学年で担任制度を設け、教員が勉学の助言、生活上の悩みの相談など、学生生活を多方面でサポートしている。

コミュニケーション力を磨く

医師としても大切なコミュニケーション力。医学部では伝統的に部活動が活発で、こうした場でもコミュニケーション力が磨かれてきた。

現在は、地域医療学習などの体験学習や少人数のグループ学習を通してコミュニケーション力を養っている。医学英語にも力を入れ、将来グローバルに活躍できる医師を育成するため、英語によるコミュニケーション力向上も目指している。

実践的な学びを推進する医学教育学教室



入学から卒業、研修終了まで

カリキュラムの改善・卒後の初期臨床研修・教育スタッフの能力向上などの教育推進業務を担う医学教育学教室が2003年に開設された。

「早期体験学習」や「臨床医学総論」、学内外の施設における臨床実習や国際交流も担当するなど、実践的な学びを推進している。

診療科と協力し指導体制の充実を図る

2004年に必修化され、その後も毎年改正される医師臨床研修制度に合わせ、各診療科と協力しながら、より実践的で質の高い臨床研修および研修指導体制の構築を目指している。また、卒前から卒後まで、教員(指導医)・専攻医・研修医らが後輩医師や学生を指導する体制を組んでいる。

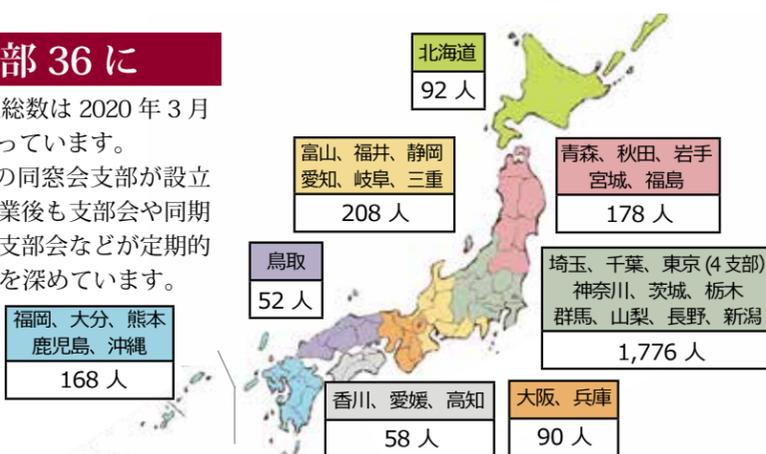
卒業生の支部 36 に

医学部の卒業生総数は2020年3月現在4,322人となっています。

日本全国に36の同窓会支部が設立されています。卒業後も支部会や同期会のほか、女性の支部会などが定期的に開催され、交流を深めています。

※表の見方

設立支部
地方同窓会員数



古関裕而作曲の校歌

1975年に誕生した杏林大学校歌。作詞は池田文雄、作曲はかの古関裕而です。看護専門学校で戴帽式の際に歌われた「キャッピングの歌」の作曲も同氏による。



校歌レコーディング時の写真。松田進勇初代理事長(中央)の左が古関裕而氏、右が藤山一郎氏

杏林大学校歌 作詞 池田文雄 作曲 古関裕而

日の光 杏林の 花は薄紅(うすべに)
 若き血は 真実(まこと) ひとすじ
 奥深き 学びの道を ねがい求めん
 雲流る 清澄(せいちょう)の 白き学舎
 友よ師よ 縁(えにし)うるわし
 日に新た 科学の英智 きわめ尽くさん
 風香る 信愛の 眼(まなこ) すすしく
 もろ人の 生命(いのち) 尊し
 董奉(とうほう)の 恵の林 みのり仰がん
 うみやまを はるか往くとも
 ともしびを 明(あか)く 照らさん

特集 医学部創立50周年

これからの医学教育が目指すもの



わたなべ たかし
医学部長 渡邊 卓

医学部50周年にあたり

杏林大学医学部は今年で創立50周年を迎えることができました。卒業生は全国各地で医師として立派にその役割を果たしています。これまで医学部の発展にさまざまな形で協力、ご支援いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。

個性ある良医に

本学医学部の変わらぬ教育方針は良医、良き医師の育成です。

良医とは医師としての知識や技術に優れるばかりではなく、患者さんが何を望んでいるかを的確に判断し治療を行えること、そして当然のことながら、医師としてふさわしい人格を備えていることが欠かせません。

その上で私共は、学生たちそれぞれが個性を発揮して、多様な良医になってほしいと考えています。

地域で住民の信頼を集める良医、もちろん、最先端の技術を駆使して、難病の治療にあたる良医もいます。研究の最前

線で成果をあげ、医療の未来に貢献することも広い意味での良医と言えるでしょう。

私共は、学生たちが6年間の教育を通じて、医師としての多様な生き方を学べるよう、教育環境の整備を心がけてきました。

医師像探る経験を

病院で実際の医療現場に接することはもちろん、活躍する先輩医師の姿を見たり、話を聞いたりする経験を通じて、医師としてのキャリア形成を考えることは最も大切な機会です。介護施設などで地元地域の人々と交流し、医療者に求められる役割を学ぶ機会も設けています。東京都だけでなく日本各地の医療の場に赴いて体験し考えるプログラムも準備しました。

学生の意欲を刺激する場のひとつに自由研究プログラムがあります。学生が各教室や医局に飛び込み、医学研究や最新の医療にふれる機会です。ここでは、先生からテーマをもらい研究活動に参加します。これをもとに論文を作成し、学術講演会で発表したり、専門誌に論文を投稿したりする学生もいます。学会で、第一線で活躍する研究者の発表に直接ふれることは大きな刺激になりますし、医学研究の深さや面白さが体感できるでしょう。この試みはさらに充実させていきます。

国際化も大きなテーマです。医学英語教育の強化に加え、英国のレスター大学で行う医学英語セミナーや海外クリニカルクラークシップ(診療参加型臨床実習)に参加することにより、それぞれの国の医療や医療を取り巻くさまざまな事情を日本と比較して学べます。



日本内科学会「医学学生・研修医のことはじめ2020」優秀演題賞を受賞した学生グループと指導教員(上)。医療と地域社会の関わりを学ぶため、高齢者施設で体験学習をする学生(下左)。海外の提携医療施設で貴重な体験を積むクリニカルクラークシップ(下右)



学生のうちから、地域や社会、さらには海外へ目を向け、自分の立ち位置を知ることが必ず自身のキャリア形成に役立ちます。こうしたチャンスをぜひ活かして欲しいと思います。

こつこつ地道に

iPSに代表される生命科学や医学研究の進展、AIなどテクノロジーの進化にも目覚ましいものがあり、医療の世界も大きなうねりの中にあると言われます。新しい技術を知ることは大切です。時代の変化に柔軟に対応することも欠かせません。

しかし、それに流されてはいけません。

医学教育の基本はいつの時代も変わりません。継続的に学び、一つひとつ知識を基礎から積み重ねていくことです。医師への道に近道はありません。『こつこつ地道に』はこれまでの50年も、そしてこれからの50年も変わらぬ原点だと思います。

学生の皆さんには、この原点を大切に、大学が準備したさまざまなチャンスに挑戦して、それぞれ個性ある多様な良医を目指して欲しいと思います。

杏林大学と歩んだ46年

やん くにまさ
医学部小児科学教室教授 楊 國昌
(医学部5期生)



思索の道

入学当時の医学部は八王子にありました。今も思い浮かぶのは、校舎に続く長い坂道です。地方から出てきての寮生活。周りは林や畑ばかり。狸や蛇と出くわすのは日常でした。「俺は本当に医者になれるのか」、勉強のこと、人間関係のこと、あれこれ考え、思い悩みながら毎日登っていた記憶があります。

部活で学んだもの

しかし、こうした悩みやストレスも寝食を共にする仲間同士が打ち明け合い、励まし合うなかで、乗り越えていきました。とりわけ部活のバレーボール部で多くのことを学びました。

チームプレー、先輩・後輩との関係、礼儀作法、すべてにコミュニケーション力が求められました。医師としても教員としても最も大切なコミュニケーション力はここで鍛えられました。忍耐力もこの場で得たと思います。部活は大切です。

面倒見の良さ

杏林の教育のいいところを一言で言うと「面倒見の良さ」だと思います。

学部の担任制を置いたきめ細かい教育

システムも実効を挙げていて、杏林の優れた点だと思います。

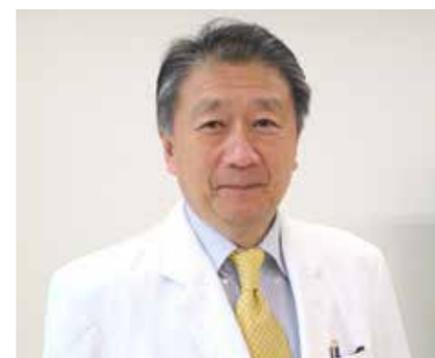
とことん怒り、とことん向き合う

学生時代、とても怖いことで有名な基礎系の先生がいました。医師になってある研究を始めたのですが、どうしてもその先生の教室との共同研究が必要でした。お願いにあがる時はとても緊張しました。しかし、先生には最終的に研究発表の論文の指導までしていただきました。この研究は著名な医学雑誌の表紙を飾り、さらに一層研究に取り組むよう大学から留学の機会まで頂戴しました。いろいろな意味で思い出に残る研究になりました。

厳しくも、最後まで指導いただいた先生は、「とことん怒り、とことん向き合う」を信条にしておられました。その姿は、教員そして医師として、学生や若い先生たちに向き合ってきた私の原点かもしれません。

学生たちに送る言葉

私がもうひとつ大切にしてきたことは「きつい限界を設定し自分を追い詰めよ」ということです。これもバレーボール部時代に得たことです。



杏林大学病院副院長。2013年4月より医学部小児科学教室主任教授

自分が思う限界より一つ高い目標を設定する。そしてこの高い目標を目指すことで、自分が思う限界を超えることができます。今も学生や医局員にそう話しています。

新たな50年に向けて

杏林大学の医学部も50年の歴史を刻んで、着実に実績を重ねてきました。国家試験の結果を見ても、その成果の一部が示されています。

学生時代からずっと杏林大学と歩んできた私も、来春からは外から大学を見る立場になります。次の新たな50年では、引き続き良い学生を育て、医学研究の質のさらなる向上により、社会に一層貢献できる大学であってほしいと願っています。



特集 医学部創立50周年

卒業生からのメッセージ

女子学生のさきがけとして

山田 榮子 (やまだ えいこ)
1976年卒業 (1期生)



三鷹駅近くで女性専門クリニックの院長をする山田榮子さん。明るい人柄と親身に相談ののってくれる先生を頼って、親子2代で通院する人も多い、地域に根付いたクリニックです。

今も杏林大学病院と連携を取り、地域医療に貢献する山田さんですが、50年前、杏林での医学生生活は石拾いから始まりました。

八王子校舎の思い出

医学部開設当初、2年生までは八王子校舎が学び舎でした。

校舎はまだ整備途中で、体育の授業はグラウンドの石拾いから始まります。校舎は細い山道を登った先にあり、雨の日は泥道になるのでヒールも履けないような日々でしたが、学生生活はとても充実していました。

新設校の意地

杏林大学医学部は、戦後初めて認可された医学部です。戦前からあった医学部とは分けて、新設校と揶揄されることも

ありましたが、それがかえって学生と教職員との一体感を生み、熱意につながりました。各分野から集った著名な先生方が熱心に教鞭を取り、学生もそれに応えようとしていました。

杏林の伝統

『健全な精神は健全な身体に宿る』という先哲の教えの元、教務関係の先生が私生活も厳しく指導しました。

「杏林では教員と学生の距離が近いとよく聞きますが、50年前も同じで、その様子が今も脳裏に蘇ります。これが伝統と言うものなのでしょう」と話します。

後に杏林大学病院で働いていた時も医師同士の距離は近く、開業した今も病院に勤務する若い後輩たちから最新の知識や情報を得たり、刺激を受けたりしていると言います。

卒業後もつながりを

山田さんは医学部同窓会女性部会の初代会長です。近年まで永く部会の活動を牽引してきました。同窓会に関心がありながら参加の機会を逃していた卒業生も気軽に集ってほしい、子供連れでも参加できる会に、そして年齢に関係なく話せる会にすることに努めてきたと言います。「これからの新たな50年では、こうしたつながりがさらに広がり、発展していってほしい」と話しています。

島民の健康守る

円山 忠信 (えんざん ただのぶ)
1984年卒業 (9期生)



円山忠信さんの診療所は、瀬戸内海に浮かぶ人口7500人弱の広島県大崎上島にあります。みかんやレモンの栽培も盛んな温暖な島ですが、65歳以上の人口が44%を占め高齢化が進んでいます。

卒業後、杏林大学病院の救命救急センター、第三内科そして東京都老人医療センターで勤務したあと32歳で故郷に戻り、以後30年余りにわたって地域医療に携わってきました。

笑いが健康の素

円山さんの信条は『笑いが健康の素』です。無医地区にある「よってみんない屋 (広島弁で立ち寄ってくださいの意)」と名づけられた高齢者サロンで、健康にかかわる医療講座を続けています。孤独になりがちなお年寄りが集って大きな声で笑うことは何よりの健康法と言う円山さん、その回数は今まで160回を重ねました。「医療講座と言うよりはむしろ漫談」とのことですが、すっかり島のお年寄りの人気者です。

「島の平均寿命を百歳に」「介護福祉を全国1位に」を掲げて地域医療や介護福祉活動を続け、急な坂道の上に住むお年寄り夫婦のため、自ら削岩機などを使って道路に手すりを作ったこともありました。

こうした活動が評価され、医療功労賞の広島県表彰も受けました。

杏林での修行のおかげで

専門は内科ですが、島ではすべてに対応しなければなりません。台風で停電する中、懐中電灯を頼りにけがの手当てをしたこともあります。土地柄から海難事故も多く、荒れる海上を救急艇に同乗して本土の病院に搬送したこともありました。救命救急センターで教えられた基礎と経験が活かされており、「今の自分があるのもすべて杏林大学での修行のおかげです」と話しています。

聴診器片手に今日も

聴診器を片手に町民がいつも笑顔でいられるように、これからも自分のできる仕事を精一杯していきますという円山さん。「まだまだ病気や貧困で苦しむ人々が多く、コロナ禍で社会が混乱しています。杏林大学には医療の研究開発とともに、基本である患者さんが主役の心ある医師の育成を続けてほしい」と話しています。

安全なお産を目指して

尾崎 康彦 (おさき やすひこ)
1986年卒業 (11期生)



「医師になってからが勉強です」そう話すのは名古屋市立大学大学院医学研究科教授の尾崎康彦さん。臨床、教育、研究に力を注いでいます。

不育症の原因を探究

尾崎さんの研究テーマは不育症です。不育症とは、妊娠はするものの流産や死産を繰り返してしまい、なかなか出産ができない症状です。名古屋市立大学医学部産科婦人科はこの研究が盛んです。着任当初はまだ新たな分野でもあり、当時の教授から誘われたのもテーマにした理由でした。

尾崎さんは特に生化学的なアプローチで、カルパインというプロテアーゼが不育症にどう関係しているかを突き止めています。その延長で2019年からは日本病態プロテアーゼ学会の理事長も務め、研究の裾野を広げるべく尽力しています。

医療者の教育にも力入れる

一方、医療者のリカレント教育(学びなおし)にも力を注いでいます。

日本は産婦人科医師や助産師が不足し

ており、危機的な状況になりつつあります。それを解消し、現在の医療レベルを維持するには、産休・育休明け医療スタッフの復職が重要課題です。そのため尾崎さんは、名古屋市立大学で復職支援の教育コースを毎年開講しています。今年はコロナ禍で、対面講義が難しくなりました。そこで、オンラインで開催したところ地元だけでなく遠方や海外からの参加者もいて、大きな手ごたえと可能性を感じています。まさにピンチをチャンスに変えることができました。

医師になってからが本当の勝負

尾崎さんは、医師国家試験に合格することはプロセスであって、決して目的ではないと言います。医学部はあくまで医師になるための知識と人間力を磨くところであり、医師になってからその知識を駆使してさらに勉強し、磨いた人間力を持って患者、同僚、先輩達とコミュニケーションを深めていく。医師になってからこそが勉強で、そこが面白いのだと。尾崎さんも今が一番勉強していると言います。

今でも卒業記念の杏林の名入りボールペンを愛用しているという尾崎さん。世界でも高いレベルにある日本の周産期医療の質を維持し、「安全なお産」を目指し奮闘しています。

恩返しの日々

武永 賢 (たけなが けん)
1994年卒業 (19期生)



東京・新宿区でクリニックの院長を勤める武永賢さん(ベトナム名ヴァー・ダン・コイ。1994年、日本に帰化)。この地域では外国人の患者も多く、親身に診療にあたる毎日です。

猛勉強で医学部入学

武永さんは1982年に難民として来日しました。「難民を助ける会」などからの奨学金を得て高校に通っていたある時、医学生になった難民の話聞き、医学部進学を決意しました。

猛勉強の末、杏林大学医学部に合格しましたが、待ち受けていたのは支援団体の財政逼迫による協力撤回という苦境でした。その時、杏林大学は援助の手を差し伸べ、安心して勉強できるよう奨学金制度も整えてくれました。これは決して忘れられないと言います。

救急の現場体験が根幹に

卒業後は救命救急センターで勤務しました。一刻を争う症状の患者が次々と運

ばれてくる救急の現場は厳しく、矢継ぎ早に指示が飛んできます。時に日本語が理解できなかつたり、医師としての経験の浅さから対応が難しいこともありましたが、しかし、そこで必死に学んだことが、医師としての自分の根幹を作ったと当時を振り返ります。

今、自分にできること

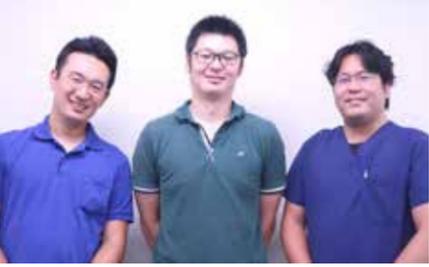
武永さんのクリニックにはミャンマー、タイ、韓国、ネパールなどから来た外国人患者が多く訪れます。彼らの中には健康保険に加入していない人も多く、またコロナ禍の今、他院で門前払いされる例もあるそうです。しかし、彼らの苦しい立場が痛いほどよくわかるという武永さん。決して見放さず、彼らの支えとなり続けています。

新型コロナウイルスへの怖さはあるものの、使命感と救急で培った度胸で診察にあたっている武永さん、「杏林大学はとてまあたか大学です。奨学金設立に尽力してくれた松田博青理事長や当時お世話になった先生方の名前と顔が今も次々に浮かんできます。今まで自分はとても多くの恩を受けてきました。とても返しきれものではありません。苦しんでいる人たちを少しでも助けられるように頑張りたい」と話しています。

特集 医学部創立50周年

卒業生からのメッセージ

同期3人で訪問診療所



左から
小野寺 亮 (おのでら りょう)
肥留川 一郎 (ひるかわ いちろう)
宮方 基行 (みやかた もとゆき)
 ともに 2008 年卒業 (33 期生)

井の頭公園通り沿いの閑静な住宅街にある「武蔵野みどり診療所」。ここは、三鷹・武蔵野エリアの地域包括ケアシス

テムの一翼を担う訪問診療の拠点です。運営するのは、本学を 12 年前に卒業した小野寺 亮さん、肥留川 一郎さん、宮方 基行さんです。

2019 年の開設以来、対応した患者は 1,500 人を超えます。その多くが杏林大学病院はじめ、野村病院、武蔵野赤十字病院などからの紹介者です。

訪問診療という選択

3 人は卒業後、杏林大学病院の救急科、呼吸器内科で専門性を磨き、地域の医療機関で経験を積んできました。いつも気に掛かっていたのが、病院での治療に限りのある末期がんの患者、通院に苦労する高齢者などへの対応でした。

そうした患者さんのために、できることがあるのではないかと。それが、杏林大学病院などで築いたパイプを活かして、

各自治体が進む地域包括ケアシステム

地域包括ケアシステムとは、高齢者が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けられるよう、医療・介護・生活支援などが一体的に提供される体制のこと。団塊の世代が 75 歳以上となる 2025 年に向け、各自治体では地域の特性・実情に応じた地域包括ケアシステム構築への取り組みが進められている。

学生時代からお世話になったこの地で訪問診療を行うことでした。

心に寄り添い信頼関係を

患者さんは不安や痛みを抱えていても、「大丈夫」と答えることが多々あります。3 人は、言葉の真意をつかめるよう、時間を掛けてコミュニケーションをとることで、不安を取り除くことを大切にしています。

患者さんの暮らしに近いのも訪問診療の特長です。また、3 人体制だからこそ 24 時間 365 日、救急の連絡に対応できます。

3 人の目下の悩みは、患者さんに再入院を勧めたいが、新型コロナウイルス感染症の影響で、家族と面会できなくなる可能性もあること。

本人や家族が治療に納得し、安らかに最期を迎えられた時に、自分達の存在意義を感じる、と話しています。

友と過ごす時間を大切に

「学生時代に友人と過ごす時間を大切にしてほしい。一緒に学び、部活などで苦楽を共にした友人は、かけがえのない存在」と話す 3 人。訪問診療所で働く姿が、それを示しています。

教育・研究環境を整え新たな半世紀へ



まつだ たけあき
 副理事長 **松田 剛明**

新型コロナから得た教訓

医学部創立 50 周年という節目の年に、私たちは新型コロナウイルス感染症という大きなテーマに直面しました。病院を中心に、時には恐怖を感じながらも、医療従事者や職員は迅速・的確に対応してくれました。

一連の動きを通じて、私は今後の医学教育のあり方についても、いくつもの教訓を得たように思います。

新たな教育スタイルも

そのひとつは、未知の疾患に備えた多様な分野の専門家の育成です。

人類を脅かす新たなウイルスの発生や、温暖化で国内でも熱帯病が蔓延する恐れもあります。今回、本学では感染症の専門医がいたことが大きな支えになりました。時代を見越す先見性を持って、新たな分野や疾病を視野に入れた人材の育成が必須です。

教育のスタイルも変えていくチャンスです。私たちは、医学教育の中で臨床現場での学習や自分で考える力の涵養が不可欠と考えています。しかし、基礎的な知識を身につける座学に多くの時間が取られているのが実態です。今回の経験でオンラインを活用すれば基礎的な学習は自宅など、どこでも、いつでも可能なことがわかりました。大学の授業では、積極的なディスカッションや病院での臨床

学習に時間を向けることもできます。新しい医学教育の形を模索していきたいと思えます。

箱の中には心を入れる

新校地で 11 月に着工予定の医学部の新講義棟には、これらが可能になるよう思いを込めています。

図書館に代わるラーニングセンターもそのひとつです。座って書籍・文献を読むだけでなく、学生同士の積極的な意見交換の場となります。

小さな教室を揃えて教員との双方向のディスカッションを可能にします。学生の考えを引き出し、成長させるための細かい指導ができる教育環境にしていく考えです。

新講義棟に続く大型プロジェクトとして、今後 10 年をめどに三鷹キャンパス全体の環境整備に入っていきます。ここでは研究部門の環境整備に一層力を入れたいと考えています。

こうした建物や機材の充実以上に大切なのが、教育や研究に対する情熱や中身の充実です。『箱の中には心』が入っていないといけません。

オリジナリティある医師育成

これからの若者、とりわけ人の命を預かる医師を目指す学生たちは、どんな逆境にも耐え抜く力、それを可能にする自分で考える力、行き詰まりを打破する力が求められます。その上でオリジナリティが必要です。さまざまな経験を重ねて独自の創造性を磨き、自分にしかできない分野を持った医師になってほしいと思えます。

新たな 50 年に向け、私たちは上述した方針を実現するためのさまざまな方策を進めてまいります。学生諸君には、自分の力を存分に発揮して頑張ってください。

教員にも熱意ある指導と取り組みが求められます。私も先頭に立ってこれを推進していく決意です。

戦後初の新設校のひとつとして設立された本学の医学部は、教育に情熱を注いだ先人の努力で着実に成果を積み上げてきました。

この 50 年の歴史を礎に、新しい医療

のあり方にも対応できる、オリジナリティあふれる医師を育ててまいります。皆様方の引き続きのご支援をお願い申し上げます。



ラーニングセンターイメージ



外観イメージ



チュートリアルルームイメージ

6階建ての新講義棟にはラーニングセンターや少人数学習のためのチュートリアルルームなどが配置される予定

ウィズコロナの教育

学生たちがキャンパスへ 新しい学びの形 始まる

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、本学の教育にも大きな影響が及んでいます。学生の安全を最優先するとともに、実習のある医学部・保健学部では患者さんへも十分配慮したうえで、教育活動を続けています。

課題提示型、オンデマンド配信型、リアルタイム配信型の遠隔授業は後期も継続しますが、対面授業も行っています。各学部の教育について、教務部長が報告します。



後期の授業が始まった9月16日の井の頭キャンパス



教室や実験室では密を避けるため間隔をあげ着席

医療現場での教育最優先に

おおにし ひろあき
医学部教務部長 **大西 宏明**



実習中心に対面授業

医学部では、学生、患者さん、ならびに教職員の安全を最優先に、刻々と変わりゆく状況の中で、それぞれの時点で実施可能な最善の教育活動を行っています。

実習については、対面授業を順次再開しています。医療職は、その本質の部分においてテレワークと相容れない職務であり、学生時代から診療や医学の現場に接していることを特に重要視するためです。

感染防止は医師の基本

登校して友人や教員と触れ合うことは、医師として必要なコミュニケーション能力を醸成し、かつ貴重な学生生活を有意義に過ごすうえでも必要不可欠と考えています。一方で、医師を目指す者として、常に感染症拡大防止への注意を払

うべきことは言を俟ちません。対面での講義／実習を実施する科目においては、感染防止策を徹底して指導・実施します。

教育環境の充実追い風に

このように、予期せぬ事態に直面した今年度ではありますが、当医学部にとっては創立50周年の節目にあたる年です。4月には、日本医学教育評価機構より、当医学部の医学教育プログラムが世界医学教育連盟(WFME)の定める基準に適合しているとの認定を受けました。

一方、三鷹キャンパスでは最新の設備を備えた新しい校舎の建設が間もなく始まります。

次なる50年に向け、これらの教育資源を最大限に活用し、不測の事態にも揺るぎない教育体制を着実に整備して参る所存です。

万全な感染対策で教育の質保つ

たぐち はるひこ
保健学部教務部長 **田口 晴彦**



学内実習は対面で

後期は、遠隔授業と対面授業を併用して行います。座学は原則、遠隔授業で、時間割通りのオンタイム授業と録画を残すオンデマンド対応をします。学内実習は感染防止対策を徹底し、対面で行います。

4つの感染防止対策

密閉、密集、密接を回避するため、次の感染防止対策を行います。

- ①施設換気に加え実習室のドアの開放、30分に1回、5分程度の窓開けの実施
- ②実習グループを少人数化し、分散着席でソーシャルディスタンスを確保
- ③マスク(一人当たり50枚配布済)の装着、必要に応じてフェイスシールドも着用
- ④密着が想定される実習は、ビデオ等による指導法に変更

また、各教室に手指消毒薬を配置するほか、学生に感染防止マニュアル「授業・

実習における感染防止(保健学)」を配布し、新型コロナウイルスに関する知識とその感染対策を示しています。

学外実習の場も確保

杏林大学病院や学外の医療機関、福祉施設や学校などで行う臨地実習は、受け入れ施設と連携し、感染防止策を十分にとれる状況において実施します。

各学科には、国家試験受験のために必ず修めなければならない科目、実習、臨地実習があります。したがって、新型コロナウイルス感染症が終息していない状況であっても、感染防止に十二分の配慮をしながら教育を実施しなければなりません。保健学部は、どのような状況においても「質の高い教育を維持し、優秀な人材を輩出する」という目的を忘れることなく、文部科学省、厚生労働省の指導を遵守して対応してゆく所存です。

これまでの教育に新しい息吹を

ないとう たかお
総合政策学部教務部長 **内藤 高雄**



一部授業は対面で

秋学期は感染防止対策を万全に施した上で、杏林大学独自の感染防止のガイドラインに従い、対面授業と遠隔授業を併用して行います。

具体的には当面、1年生のプレゼミナール、必修英語、2～4年生のゼミナールは、原則として対面授業を行います。その他の科目は、春学期同様、Zoomを利用した遠隔授業を続けることとなります。しかし秋学期は、春学期の経験を十分に踏まえ、より質の高い授業を提供することに全力で取り組む考えです。

対面授業重視は変わらず

総合政策学部では、コンピュータの画面ごしではなく、互に顔を合わせ、息遣いを感じながら授業を行う、対面授業こそが大学教育であると考えています。したがって出来得る限り早期に、この新型

コロナウイルスによる感染症が終息し、井の頭キャンパスで学生たちと学ぶ日常が戻ってくることを心から願っています。

新しい教育の形探る

一方、コロナ禍での遠隔授業の経験を、これからの総合政策学部の教育に、むしろ積極的に活かしていくべきと考えています。学部教育に遠隔授業を積極的に導入することで、例えば、企業の第一線で活躍するビジネスマンの話を聞いたり、世界中の研究者の講義を受けたり、世界中の大学生たちとディスカッションをすることなどが、可能になります。総合政策学部では、以前からそうした授業も取り入れています。

今後、新型コロナウイルスによる感染症が終息した後は、伝統的な教育に新しい教育を融合していきたいと考えています。

きめ細かい学習支援を

いわもと かずよし
外国語学部教務部長 **岩本 和良**



学生の状況把握に努める

外国語学部には、教員が学生生活における様々な相談に応じるアカデミックアドバイザー制度があります。春学期は、学生全員が学びを継続できるよう、教員が担当学生一人ひとりの状況把握に努めました。

まず学習に必要な通信環境が整備できているかを確認しました。通常、対面で行う履修指導や学生生活全般の相談に加え、遠隔授業の出席や課題提出状況を教員間で集約・共有し、必要に応じて教職員がメールや電話で学生に連絡をとりました。

対面重視しつつ柔軟に対応

秋学期は、一部の必修科目を対面授業で行います。コミュニケーション能力を身につけるためには、対面での学びが必須だからです。外国語科目やキャリア関係の科目、大学入門やゼミナールなどで

対面授業をします。

学生の通学・帰宅時間を考慮し、遠隔授業はオンデマンド配信が中心となりますが、教育的観点から一部はリアルタイム配信となります。学びの入り口となる大切な時期である1年生はもちろん、全ての学部生に一層の学習支援をしていきます。

学生とつくる新しい教育

今回の経験を通して、私たち教員は、改めて学生と共に作り上げる授業の大切さを感じております。教員の工夫だけでは授業でできることに限界がありますが、学生の積極的な学びがあればその可能性は大きく広がります。

外国語学部は対面授業と遠隔授業を通して、この状況下でも人とつながるためのコミュニケーションを、学生と一緒に模索して参ります。

学びの視野を広げよう

外国語学部、保健学部、総合政策学部の3人の先生に寄稿いただきました。自身の研究や活動の中で、学生たちに知ってほしいこと、参加してほしいことがテーマです。

世情を映す短歌の魅力



外国語学部特任教授

河路由佳 (かわじ ゆか)

東京外国語大学教授などを経て2020年4月より現職。日本語教育・日本語学習の歴史、日本語文学、多言語多文化共生を研究。現代歌人協会会員で歌人としても活動

新型コロナウイルスの影響でオンライン授業となった春学期、キャンパスに通えず、落胆した方も多いのではないでしょうか。

思いがけないことでしたが、世界的な感染症の流行は人類史上、何度もありました。100年前の「スペイン風邪」は、

日本でも人口の4割以上が感染したといわれています。

歌人が詠んだ日常

歌人の斎藤茂吉は1920年正月、家族と外食したあと、発症しました。

はやりかぜ^{ひととせ}一年おそれ過ぎ来しが吾は
こも^{こも}うつ^{うつ}臥りて現ともなし (『つゆじも』)

「現ともなし」は朦朧とした状態で、茂吉は生死をさまよったようです。37歳でした。

5歳年長の窪田空穂は、一度治って、また罹りました。

病みやすき身とはなりぬと呟きて
わが手を見たり小皺よれる手を (『朴の葉』)

二人とも弱り切った様子です。

翻って2020年4月5月、緊急事態宣言下の東京の日常を詠んだ作品を紹介しましょう (角川『短歌』7月号より)。

巣ごもりの無言の口に桜餅あまくて
すこしかなしくなりぬ 松平盟子

ネタ切れの新聞の見出し細字化し
デジタル化しコロナウイルス元気 宮原勉

いつ会へるだらうか数をかぞへつつ
手のひら洗ふ手の甲洗ふ 牛山ゆう子

ビデオオフ黒い四角がわたくしで
少し疲れて参加してゐる 梅内美華子

今回のウイルスを「コロナ」と呼ぶ作品がそこここに現れたとき、太陽の光冠を指す「コロナ」ということばの使い方として批判もありましたが、原義の輝きをも纏うこのことばは魅力的で、みるみる広がりました。

最近インターネット上で話題になっているのが、イラストレーターのタナカサダユキさんの次の作品です。

しばらくは離れて暮らす「コ」と「ロ」と「ナ」
つぎ逢ふ時は「君」といふ字に

「コ」が空色、「ロ」がオレンジ、「ナ」が桃色。それらを重ねたカラフルな「君」の字が印象的なイラスト短歌です。三つのカタカナを擬人化し、今はばらばらだけど、次は集まろう、そうしたら「君」になる、と言いながら、「自粛」で会えない「君」に会いたいという気持ちが切なく伝わるのは、短歌という詩形の魔力かもしれません。

短歌で語ろう

今しばらく感染予防に留意して過ごす日々は続きそうです。この「with コロナ」の日常、みなさんも短歌にしてみませんか。



地域で育む人と人のつながり



保健学部教授

加藤 雅江 (かとう まさえ)

杏林大学医学部付属病院で精神保健福祉士として勤務。2020年6月より現職。精神保健、福祉、子どもの虐待防止活動など多方面で活躍

コロナの影響で世の中の風景がすっかり変わってしまいました。密を避け人との距離を取ることが求められるようになりました。距離を取ることによって、隣の人や何に悩み、何に苦しんでいるのかにより見えなくなりました、今まで以上に。だからこそ、誰でも困ったときには声

をあげられるようになってほしい。助けを求めることは弱さではなく、生きていくうえで不可欠なことだと思うのです。こんな風に考えるようになったのは大病院のソーシャルワーカーとして患者さんや家族の話を聞かせてもらっていたからかもしれません。

安心を子どもたちに

たくさんの生き辛さを抱えて苦しみながら毎日を過ごしている人たちの話を聞く中で、子ども時代に子どもらしく振舞うことを保証されずに育った人の多いことに気づきました。自分を認められない子どもたちはいろんな「経験」が少ない。信頼できる大人との「出会い」が圧倒的に少ない。この経験の少なさにより子どもたちは安全な場で失敗することを学べず、困ったときに困ったと相談するすべを知らないまま大人になります。そこで、子どもたちが安全に、安心できる大人と

つながりが持てるよう、NPO法人居場所作りプロジェクトだんだん・ばあを立ち上げました。

地域に芽生える新しい世界

場を作ると、場は生き物のようにどんどん形を変え、成長していきます。子どもたちの育ちを地域全体が支える仕組みができてきます。居場所づくりを通してできたつながりが、地域を元気にしていく取り組みにつながります。

そこで見てきたのが、人はそれぞれ見えているものが違うということ。異なる分野の人が視点を共有することで、もっと横断的な活動ができる。点と点を結ぶつながりが線となり層となり多様な価値観が共有される。そんなことを考えて、2019年に三鷹市内の異業種の人達が情報交換をすることで、互いに視野を広げる場所、「しゃばねっとミタカ」をつくりました。この場所がどんな風に形



を変えて成長していくのか、楽しみです。「地域」を共通言語に語られる縦横無尽なこの会は視野を広げ、自分の専門分野を強固なものにしていき、他者への理解を促します。

共に活動してみよう

やはり人は人に支えられて生きているのだと思います。地域を耕して、たくさんの仲間を増やし、協働していく、そんなことを目指して一緒に活動してみませんか。地域とともに過ごす時間は豊かな気づきを与えてくれます。

変容する プライバシー の意識

総合政策学部講師 **尾崎 愛美**



おぎさ あいみ・KDDI 総合研究所アナリスト、慶應義塾大学大学院法学研究科助教を経て2019年4月より現職

20世紀の後半から21世紀のはじめにかけて、情報通信技術は飛躍的に進化を遂げました。その代表的な例として挙げられるのが携帯電話です。現在、どの携帯電話にも標準搭載されているのがGPSなどを利用して位置情報を把握する機能です。アプリの中には、この機能を利用して自身の位置情報を共有するものがあります。

便利な機能が一転

位置情報共有アプリに関する社会的受容性については、興味深い変化があります。2011年、「カレログ」というアプリをめぐって炎上事件がおきました。このアプリはスマートフォンのGPS機能を用いた位置情報通知サービスでしたが、女性がパートナーの浮気防止を目的としてパートナーの携帯電話に同意なくこのアプリをダウンロードするといったケース

が相次ぎ、男性を中心に批判が殺到しました。最終的に「カレログ」は、開発・提供の中止を余儀なくされました。

従来、位置情報は、プライバシーの中でも特に保護の必要性が高いとされてきました。裁判例においても、位置情報について、「対象者の交友関係、信教、思想、信条、趣味や嗜好などの個人情報網羅的に明らかにすることが可能であり、その運用次第では、対象者のプライバシーを大きく侵害する危険性」があることが指摘されています。「カレログ」は炎上が想定可能な事例でした。

アプリで繋がりたい若者たち

2020年現在、位置情報追跡アプリが、若者を中心に人気をみせています(なお、現在流行しているアプリは、「カレログ」と異なり、同意の上で位置情報の共有を許可するものであり、必要であれば自身

の位置情報を特定できないように設定することも可能です)。そして、その背景として、「現代の若者が「スマートフォンを通じて特定の友人・知人とつながっている時間」をとにかく重要視」しており、「〔位置〕情報を常時提供することは、そうした「繋がりたい」欲望を満たしている」のではないかという分析が挙げられています(鶴ノ澤直美『女子高生がインスタばりに「位置共有アプリ」にどハマりしてるワケ』現代ビジネスHP <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/65823> 2019年7月12日)。

社会の変容に伴い、プライバシーの内容に変化が生じることは歴史上珍しくありません。上述した若者の意識の変容をみると、今後、所在に関するプライバシーの内容にも変化がみられるようになるかもしれません。



金田一 秀穂 (きんだいち ひでほ) : 1953年東京生まれ。東京外国語大学大学院修了。中国大連外語学院、米イェール大学、コロンビア大学などで日本語講師。1988年より杏林大学外国語学部で教鞭をとる。2019年杏林大学特任教授

美味しいものの謎

この世で一番おいしいものは何か。永遠に答えが出ないことではあるけれど、考えるのは楽しい。食いしん坊なので、こういう設問は特にうれしくなってしまう。昔、最もおいしいと思っていたのは、牛肉のステーキだった。美味しい牛肉を食べたいと思っていた。しかし、ステーキハウスは高価である。行けそうもない。美味しい肉がどんなであるのか、せめて見るだけでもしたい。そこで私が行くのはデパ地下だ。精肉売り場はなぜかたいい場合、一番奥のほうにある。行くまでの野菜や鮮魚売り場とは少し雰囲気が違う。温度が低めである。いかにもベテラン風の売り子さんたちが、売り声も出さず、お行儀よく待っている。陳列されているのは、松阪牛。白い脂の中に浮かぶ赤身の、美しい霜降り。A5ランク。これが文字通りの、垂涎的である。それにしても、100グラムが3000円というのは、いったい誰が買うのであろうか。売られているのだから、買う人がいるに違いない。しかし、見当もつかない。

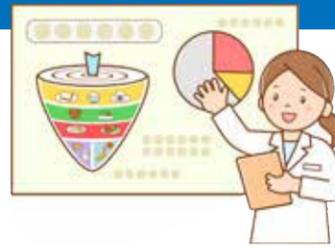
謎である。いつか買ってやろうと思っていた。今は買うのは贅沢すぎるけれど、そのうち買えるようになれるのではないかと。そうして苦節数十年、やっとそのようなことができるようになった。何せ大学の教授である。100グラム1000円なら、死ぬまでに一度ぐらい買っても、バチは当たらないのではないかと。リベンジのできる喜びを胸に、勇躍デパ地下に行って、ガラスケースの前に立って、気づいたのだ。ちっとも食べたくなくなっているのだ。脂っこいばかりで、まるで美味しそうに見えてこないのだ。しかも、医者にも止められそう。食べたいときにはお金がなかった。ようやく余裕ができたときには、身体がついていけなくなっていた。一体デパ地下の牛肉は誰が買って食べられるのだろうか。



健康ひとくちメモ 24

骨粗しょう症と栄養

なかむらみお 中村未生 杏林大学病院栄養部 管理栄養士



骨粗しょう症とは

骨強度が低下して、骨折しやすい状態になることです。わが国では1300万人以上と推測されています。

骨は、コラーゲンを中心としたたんぱく質の枠組みの上に、リン酸カルシウムが沈着(石灰化)して形成されます。骨強度は骨量(カルシウムなどミネラルの量・密度)と、骨質(枠組みとなるコラーゲンの量や構造、ミネラルの沈着具合など)で総合的に判断します。

また、ビタミンD、ビタミンK、葉酸などの不足も骨量の減少や骨質の劣化に影響します。

骨粗しょう症の予防には

骨量は成長期に増加し、20歳頃に最大骨量に達します。その後、男性では50歳代から、女性では閉経後に骨量が減少します。成長期に骨量を十分に増加させて最大骨量を高めておくとともに、その後は骨量を減少させないことが大事です。そのためには必要な栄養素を摂取し、適度な運動をすることが大切です。

さらに、高齢者では腸管からのカルシウム吸収率の低下や運動負荷の減少によ

り骨量が著しく低下していることが多く、骨量の維持とともに転倒の防止が重要です。十分なエネルギー・たんぱく質を確保し、筋肉を維持することがカルシウム摂取以上に必要です。

骨に関わる栄養素

一日にとるカルシウムの推奨量は成人600~800mg、成長期の子どもは650~1000mgです。牛乳200mlで230mg、小松菜小鉢1杯で120mgのカルシウムを摂取できます。カルシウム以外にも、ビタミンD(魚介類や茸類)やビタミンK(納豆や緑の野菜)が不可欠です。

最近では、ビタミンDの不足が世界的に問題とされており、日本では日光に当たらない高齢者や若い女性・妊婦などで不足が多いと言われています。

また、ビタミンC、ビタミンB群(B6、B12、葉酸)、マグネシウム、たんぱく質も関わっていることから、特定の栄養素にとらわれすぎず、日々たんぱく源(肉・魚・卵・大豆製品・乳製品)、野菜、果物などを含むバランスのよい食事をとることが重要です。

大学からのお知らせ 感染対策をとり学生生活再開へ

キャンパス活動制限指針策定 日々変わる情報 ホームページで確認を!

新型コロナウイルス感染症の拡大状況をレベル0から3までの4段階に分け、各レベルに応じた活動基準を示しています。活動レベルは変わりますので、必ず杏林大学ホームページを確認してください。

※9月28日現在、自粛要請は出ていませんが感染への注意が必要なレベル1です。

感染防止ガイドライン作成

登校前の検温、構内での過ごし方、休憩・昼食時の注意点などをまとめています。ホームページに掲載しています。

学内の感染防止対策

- [消毒液等の設置] 各棟入り口、主要教室ほか構内各所に手指消毒剤などを設置しています。
[教室・実験室] 大教室を使用したり、複数の教室に分かれるなどして、密にならない教室配分を実施。間隔をあけて着席するよう使用禁止座席を設定しています。
[教務課・学生支援課・国際交流課など事務部門] 窓口カウンターに飛まつ防止シートを設置しています。利用者が多い場所には、誘導のサインを表示しています。
[語学サロン、ライティングセンター] ※詳細は大学HP「留学・国際交流」ページをご覧ください
英語サロン：月・金曜日、オンラインまたは対面で実施
中国語サロン：月・水・金曜日の12時-13時、オンラインでのみ実施
ライティングセンター：火・水・木曜日、オンラインまたは対面で実施
[図書館] 開館時間：井の頭図書館10時-16時、医学図書館10時-18時(土日祝は閉館)
[井の頭キャンパスPC室1] 開放時間8時-18時(土曜日は13時まで) ※PC室2、3は、混雑具合によって開放
[学生食堂] 利用時間：井の頭キャンパス学生食堂11時-14時(土曜日は休み)、三鷹キャンパス学生食堂11時-17時(土曜日は11時-14時)

オンライン・電話・メールによる相談受付

教務課、学生支援課、庶務課、キャリアサポートセンター、国際交流センター、保健センター、学生相談室などで行っています。

クラブ・課外活動

(活動制限指針がレベル1の場合) 屋外・屋内での活動は3密とならない範囲で許可します。イベントの参加・開催は禁止します。トレーニングルームはマスク着用の上、使用前後の手指消毒を行い、利用してください。ボランティア活動は、必ず事前申請が必要です。活動にあたっては3密を避け、受入者の指示に従ってください。(※井の頭キャンパス限定)

キャリアサポートセンター コロナ禍で激変した新卒採用市場



リクルートワークス研究所の調査によると、2021年3月卒の大卒求人倍率は1.53倍と前年度の1.83倍から0.3ポイント低下しました。低下はしたものの、就職氷河期やリーマン・ショック時のような低水準とはならず1.5倍を維持し、現に大学には例年同様に多くの求人が届くなど、依然「学生の売り手市場」となっています。

業界別では、航空・観光・外食・アパレルなどは採用予定数の削減や採用中止が相次ぎました。一方で、IT・小売・陸運などはコロナ需要で大きく業績を伸ばし、採用を強化しています。

就職活動は、企業の説明会や選考もWeb化が一段と進みましたが、「移動の時間が必要なく、多くの企業の説明会・選考に参加できた」「交通費等金銭的負担が軽減した」などのポジティ

ブな側面もあります。従来の就活とは環境・採用選考ともに大きく変わります。世界、日本国内などの位置付けなどを俯瞰的に見る「鳥の目」、企業の細部まで細かく見る「虫の目」、現時点のみでなく将来まで見る「魚の目」を持ちましょう。3つの目で様々な角度から自らのキャリアを考えることが従来以上に重要になります。良い機会と捉え前向きに就活に臨んでいただきたいです。キャリアサポートセンターは、Web相談・面談対策などコロナ禍で変わった就職活動支援も実施しています。ぜひキャリアサポートセンターを活用し就職活動を乗り切りましょう。(キャリアサポートセンター 米津哲也)

- 編集を終えて.....
・今年、医学部は創立50周年を迎えました。皆様のご理解とご支援に改めて感謝申し上げます。今号は、医学部特集となっております。これを機に医学部および付属病院のこれまでの歩みに触れていただき、また、これからの展望についてもご紹介いたします。なお、緊急事態宣言解除後かなりの時間が経ちましたが、withコロナの生活様式は始まったばかりです。まだまだ終わりは見えませんが、皆様が健やかな生活を送れますようお祈りいたします。(望)
・秋を迎えて、キャンパスにもようやく学生たちの元気な姿が戻ってきました。創立50周年を迎えた医学部でも遠隔授業が続き、学生たちももどかし不安な日々だったと思います。しかしその一方で、最前線に奮闘する医師の先輩たちの姿も目にしました。人々から医療従事者への感謝の気持ちや厚い信頼が寄せられたことも実感したと思います。これまでにない新鮮な経験です。50年という記念の年に医療の原点を改めて心にとどめ、良き医師を志してほしいと思います。(鳥)
・今回、河路由佳先生に寄稿いただいた、「世情を映す短歌の魅力」はとても興味深い内容でした。調べてみると志賀直哉や菊池寛も当時のスペイン風邪を題材に取り入れて作品を発表しているようです。文学と世情は切っても切れないものですね。今回のコロナ禍も、今後の文学界にどんな影響を与えていくのか、気になるところです。読書の秋です。私も外出できないので本をよく読むようになりました。短歌づくりのかたわら、みなさんも読書してみてください。いかがでしょうか。(中)
今号では多くの医学部卒業生からお話を伺う機会をいただきました。なかでも1期生で今も特任教授として教壇に立つ高橋信一先生には、多大な協力を頂戴し、編集に大いに参考にさせていただきました。
心待ちにしていた硬式野球部のリーグ戦が1年ぶりに再開。ハツラツとプレーする選手の姿を思い浮かべながら、今回はツイッターで戦況を見守っています。(酒)
杏林大学新聞編集委員会 編集長 望月秀樹 / 広報・企画調査室
Tel.0422(44)0611 E-mail koho@ks.kyorin-u.ac.jp URL https://www.kyorin-u.ac.jp/